『心学早染草』善玉悪玉の影響
――天保から幕末まで――

関原　彩

［キーワード：①山東京伝　②心学早染草　③善玉悪玉　④浮世絵　⑤天保～幕末］

はじめに

山東京伝作、北尾政美画の黄表紙『心学早染草』は、寛政二年（一七九〇）に出版され、京伝のヒット作となった作品である。商家の若主人、理太郎の善良な心を悪魂が乗っ取って、廓通いや泥棒などの悪事を働かせるという内容であるが、主人公の善悪の心を表わした善玉悪玉は、褌や腰巻姿で、顔に「善・悪」の文字が入れられた、特徴的なキャラクターとして描かれている。

『心学早染草』から生まれた善玉悪玉は、後代になっても戯作や浮世絵、歌舞伎の世界に影響を与えた。例えば、中山右尚氏は浮世絵や歌舞伎踊りに影響した点を指摘しており、棚橋正博氏も、善玉悪玉が描かれる栄

松斎長喜画の「遊郭善玉悪玉」や坪内逍遥の『当世書生気質』、善玉悪玉を趣向とした黄表紙などの例を挙げている（1）。このように先行研究では、断片的に作品が紹介されることはあるものの、善玉悪玉が描かれた作品の全体像が把握出来るような研究は、これまでなされてこなかった。そこで本稿では、『心学早染草』の影響下に作られた、善玉悪玉が描かれた作品を収集し、時代毎の特徴について考察する。寛政から文化文政期までは別稿で述べることとし、ここでは、天保から幕末までの作品を見ていく。

なお、善玉悪玉の影響例を集めるにあたって、そのキャラクター像は、①頭部が丸で描かれていること、②丸の中には文字が書かれていること、③着衣の有無や種類は問わないこと、とする。

第一章　天保の改革の影響下の作品

天保十二年（一八四一）、将軍家斉が死去すると、老中首座であった水野忠邦は、綱紀粛正、奢侈禁止を命じた。いわゆる天保の改革である。そして天保十三年六月、出版界に大きな影響を与えた出版統制令を出した。ここにその町触を引用する（傍線引用者。以下同）。

①錦絵と唱、歌舞伎役者・遊女・女芸者等を一枚摺ニいたし候儀、風俗ニ拘り候筋ニ付、以来開板は勿論、是迄仕入置候分共決而売買致間敷、其外近来合巻と唱候絵草子之類、絵柄等格別入組、重モニ役者之似顔・狂言之趣向等ニ書綴、其上表紙・上包等江彩色を相用ひ、無益之儀ニ手数を懸ケ、高直ニ売出し候段如何之儀に付、是又仕入置候分共決而売買致間敷候、②向後似顔又は狂言之趣向は相止、忠孝・貞節等を元立

ニ致シ、児女勧善之ためニ相成様書綴、絵柄も際立候程省略いたし、無用之手数不相懸様急度相改、尤、表紙・上包等江彩色相用候儀は堅可致無用候、尤、新板出来之節々、町年寄館市右衛門方江差出改受可申候、右之通被仰渡奉畏候、仍如件、

天保十三寅年六月四日　(2)

寛政の改革でも出版統制は行われたが、天保の改革はそれよりもはるかに厳しいものであった。寛政の改革の際は、錦絵に当時流行していた笠森お仙のような一般の娘の名前を特定して描くことを禁止したものの、出版統制の矛先は主に黄表紙に向けられていた。しかし、寛政十二年に美人大首絵が禁止され、翌年に太閤秀吉を描いた喜多川歌麿の浮世絵が禁令に触れ、歌麿は手鎖五十日の刑を受けた。こうして次第に錦絵にも統制の目が向けられることとなる。そして天保の改革では、右の傍線部①のように、錦絵では歌舞伎役者、遊女、女芸者を描くことを禁じ、合巻では華美な摺りや歌舞伎の趣向を用いた内容、役者似顔が禁じられたのであった。

(一) 戯作

天保改革後の戯作界は一時萎縮し、町触（前項傍線部②）に沿って忠孝貞節や児女勧善を主旨とする内容で書かれるものが多かった。文化文政期頃から戯作にはあまり取り上げられなかった善玉悪玉は、これを機に再び用いられるようになる。

京伝の弟、山東京山は、合巻『二人若衆対紫色』（勝川春亭画、文化十四年〈一八一七〉刊）の序文では、悪玉を登場させることを渋っていたが、天保の改革が厳しい最中、弘化元年（一八四四）に合巻『忠孝早染草』（歌

川国芳画）を出した（図1）。その内容は、教訓じみた善玉悪玉が活躍する話となっている。画工が同じ国芳で、『忠孝早染草』の前年に出された教訓絵本『幼心学図絵』（天保十四年頃刊）の図を比べると、子供が机に向かう様子や善玉悪玉の服装などが類似している。（『幼心学図絵』については教訓絵本の項に後述する。）京山は天保改革の出版統制が厳しくなってからは、猫を擬人化した合巻『朧月猫草紙』など、子ども向けの赤本由来

図1『忠孝早染草』9丁裏10丁表
名古屋市蓬左文庫所蔵

図2『教訓浮世眼鏡』29丁裏30丁表
東京都立中央図書館加賀文庫所蔵

のキャラクターを出した話によって、改革の厳しい目から逃れようとしていた(3)。

滑稽本（合巻とも考えられているが、ここでは滑稽本とする。）『教訓浮世眼鏡』（万亭応賀作、渓斎英泉画、弘化元年刊）は、善玉悪玉ではなく、様々な文字を顔に入れたキャラクターを登場させている(4)。諺や格言などを言葉のままに絵解きした内容で、天之網では「日、風」の顔の神、夢通路には「魂、夢」の顔、新星には「星」の顔、一夜壁には「昨日、今日、翌日」の顔の者達が描かれている（図2）。

（二）教訓絵本・浮世絵

善玉悪玉は『心学早染草』では教訓的な役割を果たしているが、寛政から文化文政期にかけては、積極的な教導のために用いられたわけではなかった。しかし天保期からは、主に子供向けの教訓性が強い絵画に描かれるようになる。

前述した、歌川国芳画『幼心学図絵』は子供向けの絵本で、子供の生活の様子に合わせて善玉悪玉が描かれている。内容は二十四丁から成り、八文舎四世の序文に「実に勧善堂のその名もしるゝ。（中略）明の朝桜梅が含なす稚等がかたちを画たる。（中略）天保十四といふとしのくれ浅香山ならで浅草の里人なにはにちなみある八文舎四世のあるじ記」とあることから、作者は勧善堂、絵師は朝桜楼すなわち国芳で、天保十四年頃の刊行であることがわかる。いろは一文字ずつに教訓歌と絵が書かれ、子供の生活を描いている。「いろ〳〵とむやくな事をさし置てまづ手習を専らにせよ」から始まり、寺子屋での学習や悪ふざけ、屋外での遊戯や喧嘩などの場面を描く。その中に善玉と悪玉が子供と共に描かれている。最後の文字は京という字で終えられており、「京わらべおしへのためのいろは哥人の見る目もはづかしぞおもふ」とある(5)。子供が座っている後ろ

には、善玉が悪玉を退治するところが描かれているが、『心学早染草』にも同様に善玉の悪玉退治が描かれている(6)。四十八図の内、二十図に善玉か悪玉、もしくはその両方が子供と共に描かれ、子供の行動を善悪で分かりやすく表現しているのである。

また『幼心学図絵』を模倣して作られたと考えられている往来物が確認されている。『教訓子宝山』（歌川国貞画、江戸後期刊、刊行者不明）は、『幼心学図絵』の数丁を見開き一丁に収録するなど、圧縮する方向で編集したものである(7)。絵は国貞が描いているが、『幼心学図絵』の図像を引用して組み合わせているようである。このことからも、子供の姿を生き生きと描いた『幼心学図絵』は、多くの人に受け入れられたことが想像される。

歌川国芳画の「心学稚絵得（しんがくおさなえとき）」（天保十三年頃）は、心学の教えを絵解きした短冊のシリーズである。その内の一つに、善玉悪玉のキャラクターを意識して描かれた作品がある（図3）。そこでは、青地の楓模様の着物を着た男が尻餅をついており、男からは吹出しが出ていて、その中に顔に「誠」と書かれた天帝と、青い着物姿で顔に「虚」と描かれたキャラクターがいる。画中には「八百のうそを上手にならべてもまこと一ツにかなはざりけり」という言葉が書かれている。この教訓染みた言葉を、絵では「誠」の天帝を見て「虚」が退散している様子によって具体的に表わしているのである。このシリーズには、他には倹約や親孝行、色欲の戒めなどの教訓を説いたものなどがあるが、それぞれ国芳の機知に富んだ絵解きが魅力である。

教訓に基づきつつも、遊び心豊かに善玉悪玉が動き回る作品もある。天保十四年―弘化四年頃に作られた国芳の「水滸伝見立　浦島太郎玉手箱をひらく」は、浦島太郎が玉手箱を開けると、沢山の善玉と悪玉が飛び出してくるという図である（図4）。玉手箱からは煙が立ち上り、その中で棒を持った善玉は悪玉を退治してい

て、一部の悪玉は煙の枠から地面へと落ちてきている。落ちてくる悪玉を見て、亀甲模様の着物を着た二匹の亀が両手を上げて騒いでいるようである。「善玉」と書かれた扇子を持って踊る善玉もいる。善玉悪玉は、赤、青、緑、茶の腰巻姿で、頭は月代を剃っているかのように頭頂部が青に塗られている者もいる。右上に「ふくまのでんにて百八の星おはしらす見立」と書かれている通り、発端に伏魔殿の扉を開けると中から百八の魔の星が飛び出すという、『水滸伝』の発端の見立てとなっている。『国芳の狂画』の作品解説において、「本図を描き出版するに当っては何か意図があったに違いないが、現在のところ不明である」(8)と指摘されているように、善玉悪玉を用いた他の作品と違い、本作には教訓を意図する詞書等がないため、描かれた意図が推測しづらい作品である。しかし『心学早染草』シリーズ四編目として出された、曲亭馬琴作の『四遍摺心学草帋』(北尾重政画か、寛政八年刊)には、玉手箱を開けると善玉悪玉のキャラクターが飛び出すという場面が描かれており(図5)、玉手箱から出る煙の中に善玉悪玉を描く構図が類似していることから、国芳がここから趣向を

図3「心学雅絵得」
東京都立中央図書館
特別文庫室所蔵

図4「水滸伝ふくまのてんにて百八の星おはしらす見立　浦島太郎玉手箱をひらく」
舞鶴市教育委員会糸井文庫所蔵

図5『四遍摺心学草帋』3丁裏4丁表
東京都立中央図書館加賀文庫所蔵

図6「縁の綱成人鏡」静岡県立中央図書館所蔵

得た可能性は十分にあるだろう。出版統制がまだ厳しかったため、善玉悪玉を用いることで当局の目から逃れようとしたのではないだろうか。

歌川芳藤が描いた「縁の綱成人鏡」（弘化四年―嘉永五年〈一八五二〉）は、悪玉と、顔に「縁」と書かれたキャラクターが登場する（図6）。人々の胸元から出ている綱が縁を表わしており、「縁」はその綱と綱を結んで人と人の縁を結んでいる。一方で悪玉はその綱をのこぎりや斧で切って、人々の縁を切ろうとしている。また画面上部には天上世界が描かれている。善玉の役割を「縁」が担っているのである。

天保改革後の錦絵は、遊女や歌舞伎役者を描くことを禁じたため、子供向けの教訓じみた内容で描かれた。これは検閲で差し止めされないようにと、限られた画題の中から人々に受け入れられるような作品を作ったためであろう。

（三）双六

子供達の遊び道具である双六にも登場してくる。歌川芳藤の描いた「玉尽年玉寿古六」（弘化四―嘉永五年）は、各マスが玉の字尽くしの双六だが、善玉と悪玉のマスがあり、善玉悪玉はそれぞれ着物姿で描かれている（図7）。右下のシャボン玉を振り出しとして、上の御年玉を上がりとした玉尽くしの双六で、全二十七マスには白玉やお手玉などの日常に見られる事物をはじめ、尻子玉や白狐玉のような戯作に登場する玉、歌舞伎の大目玉など、玉の付く物を集めている。善玉は扇子を持って踊る姿、悪玉は腕を組んで立つ姿と、役者風に見得を切っているように描かれている。

「善悪道中出世寿古六」は、安政二年（一八五五）に国芳が描いたもので、振り出しの部分に赤い廻しの善玉と黒い廻しの悪玉が相撲の取組をしているところが描かれている（図8）。土俵下には顔に様々な文字が入った力士達が取組を見ているが、向かって右側は仁、義、礼、智、忠、信、孝などの善いとされるもの、左側には色、邪、盗、奢、欲などの悪いものがそれぞれ善玉と悪玉を応援している。この振り出しから、手習いや正直な道に進むと早く上がれるが、なまけや焼き餅、借金などの道に進んでしまうと上がりが遠のいてしまう。教訓としての要素が強く、人生の行路を教訓の双六としている。ここで善玉悪玉が振り出しに用いられている理由としては、教訓物の象徴として使われているということもあるが、顔に文字が書き込めるキャラクターとして用いやすかったということも考えられる。

これは幕末のことだが、四角く区切られているマスの無い双六も作られている。「独娘智八人双六」（歌川国貞画）は、上がりの部分に娘が文机の前に座っていて、周りには八人の役者が描かれている(9)。「八十八翁豊国筆」との署名から、元治元年（一八六四）の作かと思われる。画面左下に振り出しと書かれた火鉢があり、

机に札を並べて見ている男がいる。江戸三座の座文の入った火鉢からは煙が出ていて、その煙の中に娘と歌舞伎役者が描かれ、右から「訥升、芝翫、家橘、小團次、彦三郎、権十郎、現十郎、九蔵」と名前が書かれている。上がりに辿り着くまでには、役者の外に、「芸者狂、呑だくれ、のだいこ、稽古所、女郎買、愛敬者」などの回り道として作られたマスがある。これらは煙で描かれたところの外側にあり、善玉や悪玉が様々な仕草をしている。

図7「玉尽年玉寿古六」部分
国立国会図書館所蔵

図8「善悪道中出世寿古六」部分
国立国会図書館所蔵

以上のように江戸時代後期の双六では、善玉悪玉によって、善い行いと悪い行いを描くものが多い。江戸時代後期は、当局の目を意識して個々人が教訓を装っていたのである。時代が下って明治になると国家的な視点がより強く打ち出され、善悪の行動を教えるための教育的な道具として双六が用いられるようになる。江戸時代後期の双六の方が力士の姿で登場するなど、キャラクターとしてより自由に描かれているように思う。

（四）判じ絵

判じ物でも、顔の中に文字を書き込める便利なキャラクターとして登場する。「しんぱん浄瑠璃尽はんじもの」（歌川芳廉画、嘉永元―四年）は、浄瑠璃の外題が十一描かれているが、左上には顔に「利」と書かれた武将がいる[10]。この武将姿は鍾馗を表わしており、狐と平椀と「利」の鍾馗の三つから、「金比羅利生記」を指している。

「義太夫外題考物」（歌川芳春画、安政六年）は、義太夫の外題を表わした判じ物で、左下に「仙」と「代」の顔の者が描かれている[11]。「代」は褌姿でしゃがみこみ、「仙」にいじめられているような光景であるが、これは「仙」が「代」の追剥をしているところである。したがって、仙が代を剥ぐことから、仙代剥ぎとなり、「伽羅先代萩」という答えが導き出される。

判じ絵では、絵で言葉を表すわけだが、善玉悪玉のキャラクターは絵には表しきれないものを示す際に用いられている。顔に描かれるのは、動作の主語の部分が多く、例えば「仙が代の追剥をしている」という場面の「仙と代」、「十二ヶ月見立」（歌川芳艶画、安政五年）に登場する「正が勝つ」の「正」がある[12]。このように顔に文字を書き込める便利なキャラクターとして多く描かれたのであった。

第二章　幕末期の作品

（一）はしか絵

幕末（ここでは、万延・文久・元治・慶応期を指す。）の動乱期には、多くの病が流行し、民衆の不安に乗じて様々な刷物が出回った。「薬と病退治の図」（歌川芳虎画、弘化四―嘉永五年）は、異形の病と武装した薬が戦っている図である（図9）。（制作年代から前章・浮世絵の項に含むべき作品であるが、薬や病に関連するためここで扱う。）向かって左側には「痢病（りびやう）、癇癪（かんしやく）、はやり風、眩暈（めまひ）、疱瘡（ほうさう）、せむし、はら虫、黄疸（わうだん）」など、鬼のような異形の病がいる[13]。対して右側では、丸い頭に薬の名前が書き込まれた者たちが、武装して病と戦っている。例えば、顔に「錦」と書かれた者は、錦袋円という痛み止めに使われた丸薬、「紫」は紫金錠という薬を指している。

時代が下ると、西洋の薬も書かれた。「諸神の加護によりて良薬悪病を退治す」（歌川芳員画、慶応三年〈一八六七〉）は、西洋から入ってきた薬が病と戦っている図である（図10）。顔に薬の名前が書き込まれた薬達は、鎧を身に着けている。薬の名前は左側から「機那、マクネシヤ、阿芙蓉、セメン、ホフマン、シキタリス、大黄、アラビヤコン、吐酒石」とあり、いずれも外国からの輸入薬を指している[14]。一方で病の方は、人間の姿で頭に丸い病名が書かれたものを付けており、「疱瘡、水腫、蛔中」など、日本に昔からある病気を表わしている。画面上部では、病気を退治している薬を、天照大神をはじめ牛頭天皇などの日本の神々が応援している。

図9「薬と病退治の図」
内藤記念くすり博物館所蔵

図10「諸神の加護によりて良薬悪病を退治す」
内藤記念くすり博物館所蔵

はしか絵の多くは、麻疹が大流行した文久二年（一八六二）頃に作られた。そこには麻疹の予防や心得、まじない、食べて良いものや悪いもの、病後の養生法などが書き添えられている。

「はしか養生草」（歌川芳幾画、文久二年）は、顔に「麦、黒豆、うさい角」と書かれた者達が、それぞれ顔に書かれたものを持って、二体の麻疹の神を退治している（図11）。烏犀角とは、漢方で解熱剤として用い

られたサイの角のことである。「食てよき食物」には「干瓢、人参、牛蒡、大根、どぜう、薩摩芋、長芋、ゆり、味噌漬け、白玉、干し大根、麦、小豆、砂糖」などが書かれ、「大禁物」には「入湯六十日」などの行為や「蕎麦、胡瓜、唐茄子」などの食べ物が書き添えられている。(15)

「食してよろしきもの」(歌川芳盛画、文久二年)は、布団の上で病鉢巻きをした親父が小判を吐いている(図12)。傍では看病する娘が親父の背中をさすり、剃髪姿の医者が話をしている様子が描かれている。周りには悪玉のようなキャラクターがいるが、黒の前掛けをした者達は顔にカタカナで「ハシカ」と書かれていて、彼らは両手を上げて踊っているようである。また、親父の周りにいる褌姿の者達は、「白菜、粟、大根、小豆、焼麩」と顔に書かれており、書き添えの「食してよろしきもの」の中に入っている食物である。麻疹に良いとされた食べ物達が早く治るようにと男に寄り添っているのである。善玉悪玉のようなキャラクターだが、言葉の最後の文字は赤く塗られて、口のように見せているところはこれまでには無かった趣向で、へのへのもへじ

図11「はしか養生草」
国際日本文化研究センター所蔵

図12「食してよろしきもの」
内藤記念くすり博物館所蔵

のように文字で表情を表わしているようにも見える。そして周りには三人の会話の内容が書かれており、親父の台詞から、薬や医者への薬礼によって出費がかさんでいることがわかる。金を吐く親父に対して、医者は薬の効き目も金次第と答えており、高価な薬は皆が買うことができたわけではないことが窺える。

「麻疹養生伝（はしかようじょうのでん）」（歌川芳藤画、文久二年か）も、顔に「はしか」と書かれた悪玉キャラクターが描かれている[16]。麻疹にかかった娘が、医者に診てもらっている場面だが、娘の後ろには「はしか」が付いている。また画面左上には、「はしか」と書かれた団扇を持って踊る者達がいる。添えられた文章には、麻疹にかかった際に禁物とされる事項が書かれている。

「むかしばなし」（歌川芳幾画、文久二年）は、白髪姿の媼と若い男が首引きをしている様子が描かれている[17]。媼の後ろには顔が「ねつ」の文字、男の後ろには「麦どの」の文字が書かれた善玉悪玉のキャラクターが手助けしている。つまり、麻疹が味方につく媼と、麻疹に効く食べ物が味方につく男が、戦っているという構図となっている。

「心学身之要慎（しんがくみのようじん）」（仮名垣魯文作、歌川芳幾画、文久頃か）は、京伝作画の『人間一生胸算用』を思わせる、目鼻口を擬人化したキャラクターが描かれている（図13）。左側にいるのっぺらぼうの男の顔からふきだしが出て、擬人化された目、鼻、耳、口、手、足がいる。驚いた下女おさんがその様子を指差して報告しており、青い暖簾の向こうから男と娘、丁稚が見ているという図である。この中に、善玉悪玉のようなキャラクターがいる。丸に「艾」と書かれた腰巻姿のキャラクターが、足三里に灸を据えているのだが、灸だから顔の文字はもぐさとなっているのである。仮名垣魯文の文章には、目口耳鼻が、各々駄洒落を交えながら自分が体の中で一番重要であると言い合うが、足が驕りを戒めると各々が反省するという筋立てで書かれている。改印が見ら

図13「心学身之要慎」たばこと塩の博物館所蔵

れないため、一部の人々が楽しむため制作したものかと思われる(18)。

はしか絵や薬と病を描いた作品では、顔に薬の名前や病気に効く食材の名前などが書き込まれた。善玉悪玉のキャラクターが、顔に文字が書き込める便利なツールであったことに加え、丸い薬の形からの連想もあったと思われる。

（二）風刺画

幕末には、あわて絵と呼ばれる、社会混乱を風刺した絵が多く描かれた。文久二年八月に起こった生麦事件で賠償金問題がこじれると、戦争になったら江戸が砲撃されるという風評が広まり、万石以下諸家の妻子、老人などは知行所に移ることを許した。町触でも市中の女子供や老人は田舎に親類知人があれば立ち退かせてもよいとした。そのため人々は江戸から近郊へ避難し、車力、船頭、駕籠などの交通に関する賃金は急騰した。一方市中では売家が増加し、商売が立ち行かなくなった。風刺画の大半は名主改印や、画工板元名は書かれていないが、当時のこのような状況を描いたあわて絵は、文久三年三、四月頃の板行と考えられている。

「善悪しあんさい中」は、「持丸の思案にこれまで出入の職人四方にとりつき、なだめるところ」と書かれているように、金持商人が煙草を吸いながら、これからどうしたものかと思案している図である（図14）。持丸の台詞には、「はてどうしたものだらう、こゝにゐるはチト恐し、越してゐくにはぢめんや諸道具のやりばに困る。そして新道のあれも不憫だし、どうも思案のつけやうがねへわへア、〳〵〳〵」と書かれている。ふきだしの中にいる青い褌をした者たちは顔に、「車力、人足、日傭、馬子、雲助、舟頭、旅籠屋」と書かれており、人々が疎開すると儲けることができる職業が書かれている。一方、持丸の周りでなだめている赤い褌の者達は、人々に江戸で商売をしていて疎開されては困る職業で、顔の文字には「米屋、左官、貸本屋、廻り髪結、大工、お太鼓、薪屋、屋根屋」と書き込まれている。また画面手前には「魚屋、八百屋」が駆けつけており、「物乞い」は下駄を持って座り込んでいる様子が描かれる。高い輸送費を払って田舎に行くか、江戸に残るかを思案するという図で(19)、善玉悪玉のキャラクターが顔に様々な言葉を書き込める便利なツールとして用いられているのである。

このような社会混乱を異国人のせいだとして、彼らを打擲する様子を描くものもある。「善悪混雑噺」は、江戸市中から人々が去り、仕事が無くなった「強勇、職人、料理、大工」がそれぞれ刀や棒、包丁などを持って異人を襲い責めている（図15）。一方で「馬子、駕籠屋、雲助、車、船頭」は運送業として儲かった立場のため、彼らを押さえて止めている。また武器調達で仕事が増えた「刀鍛冶」も異人をかばっている[20]。強勇、大工、職人は、それぞれの職業の服で描かれているが、それ以外の者は赤の褌姿である。異人の腰の辺りにいる腰巻をした女性は、旦那が田舎へ行ってしまったという「御囲」つまり妾で、煙管を振り上げている。それを止めるのは「羅紗綿」という西洋人の妾である。また、画面右上にいるのは「飯盛」で、子供をあやしている。異人の足元では黄色い褌姿の「按摩」が足を掴み、「金貸し」は棒を持って殴りかかった勢いで倒れている。「物もらひ」も腰蓑姿で異人の足にしがみついている。

時代が下ると、世の中は更に緊迫した情勢となる。文久三年に長州藩が攘夷を決行し、下関戦争を引き起こ

図14「善悪しあんさい中」
東京大学史料編纂所所蔵

図15「善悪混雑噺」
町田市立博物館所蔵

した。翌年の元治元年八月には四国艦隊による下関砲撃が開始され、七月には禁門の変が起きた。幕末の絵師である河鍋暁斎は、当時の社会情勢を風刺した浮世絵を残している。

「狂斎百狂どふけ百万編」（河鍋暁斎画、元治元年）は、鍾馗など大勢の者が大きな数珠を回して百万遍を唱えている図である（図16）。百万遍を唱えている者達は、鍾馗が水戸、しゃちほこが尾張、頭に蝶々が付いた者は長州、小蛸は一本足で一橋などというように、諸大名を指し示していると考えられており、中央にいる五本足の大きな蛸は、骨無しの幕府を表わしているとされる。また、馬に乗る人物が天皇、火に包まれている人物が井伊直弼であるという[21]。弱腰の幕府に対し、有力大名が唱える攘夷の合唱を、念仏講の百万遍を見立てて、風刺している。また画面上部には、善玉のキャラクターが大勢描かれており、顔にはそれぞれ文字が書かれている。『河鍋暁斎画集二　版画・版本・挿絵』（六耀社、一九九四年）の吉田漱氏の作品解説に、「ハム・ジモ・ノノヨ・ウニ・見・ヘテ・てだ・らめ・ゑ・なり・目出・度・ケレ（ただし終わりの一つは未確定）のように読むと、少なくとも〈判じ物の様に見へて出鱈目絵なり目出度…〉ということになり、風刺画でありながら、少し韜晦していることになる」と指摘されている。最後の文字は、「うた」と書かれているように見えるが、判然としない。

「一寸みなんしことしの新ぱん」（河鍋暁斎画、慶応三年三月）は、慶応期の異常な物価高騰を風刺した作品である（図17）。画面右側では「筑波山、日光男体山、上毛妙義山、信州浅間山、須弥山ノ高、天狗の鼻、行者の足駄、赤羽のひのみ」と言葉が添えられて、高いものが集められている。山などは擬人化され、赤羽の火見櫓は頭の部分が櫓の形で描かれている。図の中央では、善玉悪玉のキャラクターが、糊をつけ紙をもって、口には刷毛をくわえて作業し、富士山の張子を作っている。彼らの顔には物価の高騰した品物の名がそれぞれ

図16「狂斎百狂どふけ百万編」東京大学史料編纂所所蔵

図17「一寸みなんしことしの新ぱん」日本銀行貨幣博物館所蔵

書き込まれている。富士山に登って刷毛で糊を塗っている者たちは、特に高騰した品々で、頂上にいる「米」、続いて「糸、呉服、薪、小豆、酒、油、茶」などである。高い場所にいる者ほど、物価指数の高いものを指している。画面左側には、二人の男が算盤をはじき、帳簿をつけながら、高く積まれた化物のようにも見える米俵を見ている。米の高騰に喜んでいるのだろう。なお、この絵には異板があり、背景の雲は、天狗や化物たちの戦いとなり、物価高の原因である幕府と官軍の対戦を風刺しているようである。また積まれた米俵に変わって、髑髏が描かれている(22)。

「道化六歌仙（どうけろっかせん）」（画工未詳、慶応四年か）は、六歌仙と黒い背景の中に善玉が描かれているが、これも幕末の情勢を風刺した図である（図18）。小野小町の静寛院宮を、大伴黒主の勅使、在原業平の薩摩藩、喜撰法師の長州藩が取り巻いている。なだめている僧正遍照は輪王寺宮で、静寛院宮の安全を願い、帰京を願う朝廷側の思惑を風刺したものと考えられている(23)。後ろの黒い背景に扇子を持った善玉がいて、扇子には「桜橋、いせゑひ、大根、勝魚節、二八宝丁、はかた、無鬼、七五三、黒ぬり、清正」などの文字が書かれている。これは声援を送っている者たちで、「勝魚節」は土佐藩、「大根」は尾張藩、「黒ぬり」は会津藩を表わしている。

藤岡屋由蔵が記した『藤岡屋日記』の慶応四年三月の稿には、「道化六歌仙」のような風刺画が持てはやされたことが書かれている。

> 此節官軍下向大騒ぎ立退ニ而、市中絵双紙屋共大銭もふけ、色々の絵出版致し候事、凡三十万余出候ニ付、三月廿八日御手入有之。
>
> 右品荒増之分

図18「道化六歌仙」東京大学史料編纂所所蔵

子供遊び　子取ろ〳〵　あわ手道外六歌仙(24)

このように、六歌仙を用いながら戊辰戦争を風刺した作品や、子供の遊びの様子を描いているように見せて、実は世相風刺しているような作品が出されたのである(25)。天保の改革時ほど厳しくなかったが、やはり政治批判や世相風刺は咎められる対象である。絵師や板元は処罰を免れるためにも、一見問題のなさそうな和歌の世界の六歌仙や、子供の日常を描く中に、風刺を込めたのではないだろうか。

以上をまとめると、幕末の風刺画では、善玉悪玉のキャラクターの顔に、社会混乱で損得する職業や物価高騰の品々の名前が書き込まれた。擬人化する際の便利な記号のように用いられていたことは、他のはしか絵等にも共通する。多くの職業や品を擬人化する際に、善玉悪玉の図像が人間を描くのに比べて簡易なため、好都合だったのではないかと思われる。

（三）美人画

三枚続きの錦絵で、遊郭を舞台に善玉悪玉が人物の周りに沢山描かれた作品は、寛政期に作例があるが、その後幕末に歌川芳幾によっても描かれた。「金近着緒締善玉」（万延元年〈一八六〇〉）は、遊郭の二階の光景の中に善玉悪玉を描いている（図19）。

画面右側の絞りの長襦袢姿の若い客の男は、物欲しげな顔の幇間に紙の束を渡している。善玉はそれを止めようとし、悪玉はもらおうと幇間の男の手を掴んでいる。悪玉の一人は、この客の心を抱え出し、その後ろで善玉が悪玉の刀を掴んでいるが事態は変わらない。客の後ろには横兵庫という遊女特有の髪型の遊女が立っている。中央には、火鉢に手紙をくべようとする遊女と、三味線を持った芸者がおり、二人は会話をしている。その後ろでは、下げ髪の遊女が二人を見ている。火鉢の前には三味線箱があり、上には座って手紙を読む悪玉や寝転がっている悪玉がおり、横には禿が座っている。画面左側では、部屋から出て帰ろうとする男性客を、後ろから遊女が肩に手を乗せて引きとめている。男の右手には帰ろうとする善玉、左手には居続けようとする悪玉たちがいて、両手を引っ張っており、客の心の迷いを表現している。『続浮世絵大家集成（三）芳虎・芳幾』（大鳳閣書房、一九三三年）の解説によると、吉原遊郭が火災のため深川へ仮宅を建てた頃の情景であるという。遊郭の軒下には提灯が下がり、外には青い水辺の風景が広がっているが、空は薄暗い。向こう岸の水平線が赤くなっていることから、日の入り時刻を表わしているのだろうか。

この「金近着緒締善玉」は、寛政期に描かれた栄松斎長喜画「遊郭善玉悪玉」（図20）に倣っている。画面右側から順に、お茶を運ぶ禿、男性二人のやりとり、心を出す悪玉、お茶を運ぶ禿、客の後ろで立つ遊女のポーズ、火鉢に手紙を入れる遊女と話す芸子などが同じ構図となっているのである。髪型などは幕末の風俗に変え

図19「金近着緒締善玉」日本銀行貨幣博物館所蔵

図20「遊郭善玉悪玉」たばこと塩の博物館所蔵

図21『山洞流悪玉狂言』5丁裏6丁表
名古屋市蓬左文庫所蔵

ているものの、長喜の作に倣って描かれている箇所が多いと言える。

同じ芳幾画の「善悪思案内」（慶応元年）という作にも善玉悪玉が描かれている(26)。中央から右側にかけて大きく吉原の様子が描かれ、画面右側の立ち姿の男性の周りには沢山の遊女がおり、吉原での遊びを楽しんでいる様子が伺える。廊下の窓の格子には、善玉が縄で縛り付けられている。そうして善玉がいないことを良いことに、悪玉たちは遊郭で金千両と書かれた箱を運んだり、大笑と書かれた扇子を持って悪玉踊りをしている。この吉原の明るい様子からは一変して、画面左側では、暗い中で女房が独り座って首をもたげている。この場面でも、縄で縛られた善玉が、悪玉によって吊るされている。

「善悪思案内」は、悪玉たちが手灯で画面右側を照らすと、その光で吉原の様子が浮かび上がるという趣向をとっている。吉原で遊ぶ夫と彼を待つ妻を、手灯がもたらす光と影の世界で表現しているところが特徴である。また彼らの心境を善玉悪玉を用いて表している。この様子は、小枠に書かれた狂句「よしはらが　あかるくなれば　うちはやみ（吉原が明るくなれば内は闇）」によく表わされている。

合巻『山洞流悪玉狂言』（浮世喜楽作、歌川国丸画、文政四年〈一八二一〉刊）には、この「善悪思案内」と類似した構図の場面が描かれている（図21）。「よしはらがあかるくなれば内はやみ」の狂句も添えられている。左を光源とした構図や、引き留める遊女、吉原で縛り付けられた善玉なども共通している。

幕末に善玉悪玉が共に描かれた美人画は、寛政期の作同様に、遊郭での心の様子を善玉悪玉によって表わしている。芳幾は、「金近着緒締善玉」は長喜の作を、「善悪思案内」は『山洞流悪玉狂言』を模倣して作品を描いている。

おわりに

以上を改めてまとめておきたい。

天保の改革によって、錦絵に歌舞伎役者、遊女などを描くことを禁じられたり、合巻は忠孝貞節や児女勧善を主旨とした内容とすべきと定められたために、町触に抵触する危険の少ない善玉悪玉がよく描かれるようになったのである。戯作や教訓絵本、浮世絵では、主に子供向けの教訓じみた内容で描かれた。善玉悪玉を多く描いた歌川国芳の作は、いずれも改革後に描かれたものである。限られた題材の中から描かなければならなかった絵師たちは、善玉悪玉が持つ教訓性に目を付けたのだろう。双六では、善い行いと悪い行いを示すために、善玉悪玉が用いられている。判じ絵では、絵には表しづらいものを示す際に、善玉悪玉のキャラクターの顔に様々な文字を入れて使われた。

幕末のはしか絵では、善玉悪玉のキャラクターの顔に薬の名前や病気に効く食材の名前などが書き込まれた。

また、風刺画では、顔に社会混乱で損得する職業や物価高騰の品々の名前が書き込まれた。これらに描かれる善玉悪玉のキャラクターは、事物を擬人化する際の便利な記号のようにして用いられていたのである。対立する二つのものが描かれることが多いため、肢体の自由がきくキャラクターは、対立した構造を表現しやすかったのではないだろうか。また幕末には、善玉悪玉と共に遊郭の様子を表わした、美人画も描かれている。

付記

本稿をなすにあたり、図版掲載のご許可を賜りました各所蔵機関に深く御礼申し上げます。なお、寛政から文化・文政までの作品については、拙稿「『心学早染草』善玉悪玉の影響 ―寛政から文化・文政まで―」（『学習院大学国語国文学会誌』五八号、二〇一五年三月）をご参照いただければ幸いである。

注

（1）『江戸の戯作絵本（三）変革期黄表紙集』（社会思想社、一九八二年）所収『心学早染草』中山右尚氏解説。棚橋正博『山東京伝の黄表紙を読む　江戸の経済と社会風俗』（ぺりかん社、二〇一二年）。

（2）東京大学史料編纂所『大日本近世史料　市中取締類集十八』（東京大学出版会、一九八八年）七五―七六頁。

（3）『朧月猫草紙』は、初編二編が天保十三年に出され、初板は役者似顔などが用いられていたが、出版統制により、絵の差し替えや本文の一部が削除され再び出版された。続く三編目は弘化二年に出されたが、役者似顔や細かい彫りが必要な模様などは見られない。津田眞弓「歌川国芳画『朧月猫草紙』と猫図」（『浮世絵芸術』一五二号、国際浮世絵学会、二〇〇六年七月）、同「山東京山作『朧月猫草紙』にみる合巻の本文と戯作性」（『江戸文学』三五号、ぺりかん社、二〇〇六年一一月）に詳しく述べられている。

（4）『教訓浮世眼鏡』の内容については、小林優「戯作図像引用考（一）―万亭応賀『教訓浮世眼鏡』に見られる

山東京伝黄表紙の図像に関する検証―」（『帝京日本文化論集』第十七号、帝京大学日本文化学会、二〇一〇年十月）、同「戯作図像引用考（二）―万亭応賀『教訓浮世眼鏡』に見られる山東京伝黄表紙の図像に関する検証―」（『帝京日本文化論集』第十八号、帝京大学日本文化学会、二〇一一年十月）に詳しく、応賀が京伝の黄表紙図像を引用していることが述べられている。また、京伝の「丸に文字」の擬人表現を、「天之網」「夢通路」「新星」「一夜壁」で踏襲していることも指摘されている。

（5）図版は、悳俊彦監修解説『国芳の絵本二』（岩崎美術社、一九八九年）一〇四頁、『絵図集成近世子どもの世界絵図編第一巻　子ども・手習い』（大空社、一九九四年）五六頁、上笙一郎編『日本〈子どもの歴史〉叢書七　絵本西川東童／絵本大和童／竹馬之友／幼心学図絵／江都二色』（久山社、一九九七年）二〇六頁に掲載されている。

（6）『心学早染草』十四丁裏十五丁表、理太郎が道理先生に教導を受けている場面。図版は、棚橋正博他注解『新編日本古典文学全集七九　黄表紙　川柳　狂歌』（小学館、一九九九年）一九二頁参照。

（7）往来物倶楽部ホームページ、新発見の往来物のページを参照した。（http://www.bekkoame.ne.jp/ha/a_r/sinhakken_266-270.htm）

（8）稲垣進一他編著『国芳の狂画』（東京書籍、一九九一年）九〇頁。

（9）図版は、高橋克彦『江戸のニューメディア　浮世絵情報と広告と遊び』（角川書店、一九九二年）一一五頁、山本正勝『絵すごろく　生いたちと魅力』（芸艸堂、二〇〇四年）一九頁に掲載されている。

（10）図版は『江戸の判じ絵～再びこれを判じてごろうじろ～』（たばこと塩の博物館、二〇一二年）一二〇頁に掲載されており、判じ絵の解釈についてもこれを参照した。

（11）図版は注（10）書、一二二頁参照。

（12）図版は、岩崎均史『江戸の判じ絵―これを判じてごろうじろ』（小学館、二〇〇四年）一九頁に掲載されており、判じ絵の解釈についてもこれを参照した。

（13）薬の効能や、病名の詳細は、『病まざるものなし～日本人を苦しめた感染症・病気　そして医家～』（内藤記念くすり博物館、二〇一一年）に詳しく掲載されている。

（14）注（13）に同じ。

（15）画中の文章の翻刻は、富澤達三『錦絵のちから　幕末の時事的錦絵とかわら版』（文生書院、二〇〇四年）所収「付

録　はしか絵解読文章」でなされており、本稿で取り上げている「はしか養生草」「食してよろしきもの」「麻疹養生伝」「むかしばなし」も掲載されている。

（16）　図版はMuseum of Fine Arts,Boston（ボストン美術館）ホームページ（http://www.mfa.org/）、「Treatments for Measles (Hashika yôjô no den)」（Accession Number：11.37337）参照。

（17）　図版はボストン美術館ホームページ、「Fairy Tale (Mukashi-banashi)」（Accession Number：11.41239）参照。

（18）　小川祐貴子「仮名垣魯文・文　落合芳幾・画　心学身之要慎」（『明治大学博物館研究報告』第一七号、明治大学博物館、二〇一二年三月）に、本文の翻刻と語釈、絵の解説が述べられている。

（19）　絵の解釈については、『幕末の風刺画―戊辰戦争を中心に』（町田市立博物館編・発行、一九九五年）作品解説、南和男『幕末維新の風刺画』（吉川弘文館、一九九九年）を参照した。

（20）　注（19）に同じ。

（21）　南和男『幕末江戸の文化　浮世絵と風刺画』（塙書房、一九九八年）、同『幕末維新の風刺画』（吉川弘文館、一九九九年）に、図中の人物についての詳しい分析がある。

（22）　絵の解釈については、『幕末の風刺画―戊辰戦争を中心に』（町田市立博物館編・発行、一九九五年）、京極夏彦・多田克彦編著『暁斎妖怪百景』（国書刊行会、一九九八年）作品解説を参照した。

（23）　注（19）に同じ。

（24）　鈴木棠三他編『近世庶民生活史料　藤岡屋日記』（第十五巻、三一書房、一九九五年）五〇五頁。

（25）　「幼童遊び子をとろ〳〵」（三代広重画、慶応四年二月）も、「道化六歌仙」同様に戊辰戦争の双方を風刺している作品である。幕末にはこのような子供遊びにやつした風刺画が多く描かれた。

（26）　図版はボストン美術館ホームページ「The Good and Evil Influences」（Accession Number：11.41140a-c）参照。

The Influence of "Good Spirit and Evil Spirit" by "Shingakuhayasomegusa"
—from 1830 to 1868—

SEKIHARA,Aya

"Shingakuhayasomegusa" called *kibyoshi*, published in 1790 by Santo Kyoden was a great hit. "Good spirit" (*zendama*) and "evil spirit" (*akudama*), which the main character had expressed his heart of good and evil was with a loincloth and the letters of good and evil were put on his face.Tese were drawn as its distinctive character. The fields of *gesaku*, *ukiyoe* and kabuki were also affected by the "good spirit and evil spirit" which had been created by "Shingakuhayasomegusa".

This paper is to collect works drawing the "good spirit and evil spirit" which were made under the influence of "Shingakuhayasomegusa" and review their features by each period. It covers from Tempo era to the end of the Edo period (1830-1868).

After Tempo reform the "good spirit and evil spirit" were used a lot because very few risks of being against laws. It was popular in *gesaku*, *ukiyoe* and educational stories for children. It was more like instructive for children. In the play of *sugoroku* the "good spirit and evil spirit" were used to teach children both good and bad. In *hanjie* or rebus, when it was difficult to express their feelings, various letters were put on the face of the character of the "good spirit and evil spirit".

In *hashikae* and caricature at the end of the Edo period the "good spirit and evil spirit" were used as useful signs to personify things by putting names of things on faces. Also, at the same period the *bijinga* were drawn along with the "good spirit and evil spirit" and an enjoyable atmosphere of red-right district.

（日本語日本文学専攻　博士後期課程一年）